

# The Sakato News

DEMOLITION SITE REPORT Vol.201501

Edited and Published by SAKATO CO.,LTD.

314, Chigusacho, Hanamigawa-ku, Chiba 262-0012 tel.043-286-5400 fax.043-286-4187 info@sakato.jp [www.sakato.jp](http://www.sakato.jp)

## PACLER MAGNUM

小割機 パクラ マグナムシリーズ

「レンタル30年のノウハウで生み出す新しさとは」



THE NEXT WILL BE THE BEST  
**SAKATO**



DEMOLITION SITE REPORT Vol.201501

## レンタル30年のノウハウで生み出す新しさとは

小野寺 公助(おのでら こうすけ)氏 (写真左)

1976年生まれ。株式会社東部重機(埼玉県さいたま市)取締役副社長。 創業者の小野寺貫一社長は父。解体機レンタル及び修理業を営む。営業の最前線に立ちお客様のニーズを取り込むスタイルで人気がある。右はSAKATOの坂戸正幸。

弊社は昭和1978年に創業。30年以上に亘り解体機アタッチメントのレンタル業を営んでいます。KATO やヤンマーといったショベルメーカー指定サービス工場としての顔もあります。塗装板金工場、溶接工場、洗車工場、分解組立工場、15トン門型クレーン設置の保管ヤードなどからなる設備を持ち、お客様に品質の高いメンテナンスを提供しております。

創業時、世に出始めた解体機のレンタルを先駆けて始めることを決めました。サカトのペンチャーをミニから0.7クラスまで取り揃えたのです。解体機の原型となったペンチャーは様々な構造物に対応して、多くの解体現場に出しました。そして様々な部分のメンテナンスを経験してノウハウを蓄積してきました。昔の機械を知っていると今の機械の故障したり破損したりするところが予想できたり、その直し方もよくわかります。

「修理のコツやポイントがわかる」、これは当社の強みです。また東部重機はメーカーの指定サービス工場ですが、メーカー以上のサービスをお客様に提供している自負もあります。メーカーで対応しないことに当社が対応することです。メーカーにはないオリジナルの補強部品などを自社で製作しています。

当社のレンタル機は首都圏の丈夫なビルの解体で使用されることが多い。だから解体機は磨耗や消耗もその分激しいでしょう。そのための予防策として、自社製作の補強やプロテクターなどを自社開発しているのです。ですから長期間にわたるレンタル現場では当社を選んでいただけているようです。「解体機が激しい使用に耐えられる予防策」これも当社の強みです。

### 「27年間使用しているパクラを修理した」

解体機選びでは丈夫さは重要。小割機はパクラマグナムをレンタルしています。実は他のメーカーの小割機もある。しかしパクラの耐久性の高さは安心につながります。現場で破損や故障するようなことは避けたいです。近年はパクラを増車しています。0.25、0.45、0.7、1.2クラスのマグナム2500までをラインナップしています。

昨年2台ほど増車したのは0.7クラスの「マグナム1300」です。これについては当社と多くの取引のある解体業者様が高い評価をしているのを聞いたのがきっかけでした。

私自身が営業担当しており、ビル解体作業のペースが早いことで注目しているお客様です。



バックホウの塗装工場にて。カウンタウエイト部の傷を補修。丁寧に研磨をして仕上げをしている様子。加藤製作所の指定サービス工場として30年余りの実績がある。



レンタル機のパクラマグナム2500。質量2500kgの1.2クラス用小割機。小割処理量が稼げるため、工期の短い大規模現場からのレンタル需要が多い。



製造後27年を経過してなお使用されている「パクラSPAC70-5」。ツース交換と整形肉盛溶接の作業を行う溶接作業場の様子。メインシャフト部付近には修理で取り付けられたと思われる補強板が溶接されているのも見える。修理を施しながら長年丁寧に使用し続けていることがわかる。熟練の技を醸し出す小割機に巡り合えた。

他社機をレンタル現場に入れた際に言われたのです。「小割は何といってもパクラなんだ。マグナム 1300 を持ってきてほしいよ。」あまりにもハッキリと言われたので「なんだよ」と思いましたが、その理由に関心を持たざるを得ませんでした。これまでレンタルで導入していた2機種とパクラを研究してみました。今までのお客さんの評判からは、軽い、早い、このことは十分に知っていました。

パクラを使っている人たちに聞いて回りました。分かったのはどうやら「コンクリートガラを嘔みやすい」ということなのです。現場サイドとしては結局これが一番大きな理由でしょうね。

パクラの形状でどこがどう違うと言うのはかなり難しいようですが、嘔みやすいということです。

私のお客さんの中に、ものすごく操作の上手なオペレーターさんの知り合いが数人いらっしゃいます。そういう人たちの小割作業を見ていると惹きつけられますね。ガラを必要以上に嘔まないし、操作は丁寧だし、ガラの嘔んだところは確実に割れていますからすごいと思います。そのオペレーターさんたちはみなパクラを好んで使っています。そうなるパクラはプロフェッショナル向きなのかもしれないとも思いますがどうなのでしょう。プロのオペレーターに合わせて設計しているので、機能やプロテクターなども削ぎ落としてあるのか。究極にシンプルな設計かもしれませんね。

こういう設計の違いは他の道具でも同じか。扱いやすくて快適なビギナー向けのスキー道具と、扱いにくいが高パフォーマンスを出せるプロ向けのスキー道具は違います。

プロはプロ向けの道具をうまく使いこなすものだし、それを好むものなのです。

たまたまですが、当社の整備工場に平成元年製造のパクラがあります。お客様からツース交換修理を請けているのです。型式は「パクラ SPAC70-5」です。この型は材質がスウェーデン鋼でもなく、増速バルブも無い。でもパクラ独特の形は一緒なので、これはサカトのパクラだなと分かりました。これを27年もの長い間、私の担当する解体業者様は使い続けているのです。どうしてこんなに長い間使うんだろうと考えてみました。きっと長持ちさせるような使い方もするんだろうし、メンテナンスをいいタイミングで毎回キチンとしているんでしょう。そしてそうすれば長持ちする設計になっているのでしょうか。改めてパクラの売りであるその耐久性に驚きました。ユーザー側もメーカー側もプロだなと、小割機を見ていて感心したところです。

## 「現場に最高の機械を届けたい」

当社にはポリシーがあります。それは「職人に最高の機械を届けたい」というものです。

年々大型の解体現場とのお付き合いが増えていきますし、その準備も大切です。メンテナンスには気を使います。例えば、解体機が油漏れしていたとか、カッター隙間調整ができていなかったとか、ツースが磨耗しすぎていたとか、そういったことで解体機に性能は低下します。それが原因で解体が進まないこともあります。

いい機械はいいメンテナンスで。だからメンテナンスしないレンタル機は出荷しません。

また、都心のSRC造大型オフィスビル解体などは、超高層ビル建築と解体が一体となり、工期も制限され大変な現場がありました。夜間作業も普通のように、解体業者様も大変です。

あの時は現場肉盛りに対応して喜ばれました。最高の機械を届けたいという言葉には、いいサービスを届けるということも含んでいるのです。

## 「先進的な機械を開発してレンタルする」

他社に先駆けて先進的な工法をレンタルとして出したいという考えを持っています。

2008年に電動とエンジン兼用機ミニショベル「SK09SR」を業界初でレンタルしました。排気ガスの出せないビルの室内でも稼働できるので、手作業でおこなう内装解体を機械化したのです。これはハンドブレーカーの3台分以上の仕事量をこなせるようになり、はつり業者様から喜ばれたのです。素晴らしい現場実績です。その後、これが原型となり、リチウム電池式バックホウがメーカーから市販されるに至りました。あのレンタルが市販のきっかけになったかもしれない、うれしかったですね。

2011年にはSRC造ビル解体機である「SDSシリーズ」を導入しました。当時SDSは既に東京都心でかなりの数の大型SRC解体工事実績を積んでいました。今後もSRC大型ビル解体工事は増加することはわかっていましたので導入したのです。丈夫なSRC造ビル解体への貸し出しが増えました。

SRC造の解体機については他にも試しました。やはりSRC解体すると機械が壊れやすいのです。それにSRC造といっても色々なのです。内部鉄骨がトラスなら普通の大割機で解体している人もいます。解体がしづらくて困っていたのは、内部鉄骨はH形鋼の丈夫なSRC造ビルの解体です。これを解体機だけで解体するとなると、どうしてもできなかったのです。レンタルするには、よほど耐久性がなければ導入できませんね。

0.7のSDS250、0.45のSDS150、そしてSDS400SRCアーム(1.2と1.6クラス兼用機)を導入しラインアップしてきました。SDSシリーズのデザインは無骨なイメージ。細かいつくりで気になることもあります。また操作方法もコツがいるようで玄人好みの製品です。それでもSRCビルを解体するようなプロの職人さんたちはうまく使いこなします。現場を成し遂げて無事に帰ってくるレンタル機を見ると頼もしい。導入4年目になりますが、消耗品以外はまだ修理したことがありません。

2014年には解体バックホウを開発しました。コベルコ建機との共同開発のSK260ビックヘッドです。0.9クラスのバックホウにSDS400SRCアーム(1.2と1.6クラス兼用機 質量4000kg)を装着できるバックホウなのです。これは丈夫さを増してゆくビル解体に対して、0.7解体機で十分に対応できない部分も出てきています。そこを解決したくて0.9クラスバックホウでワンランク上の解体を実現させたのです。見た目がスタンダードになっており操作しやすいのが特長です。小割機も装着できます。SRC造などのビルの階上解体では、大型解体機の装着ができることが有利で、その威力を発揮しています。その結果ブレーカーを使わずに済んだり、工期を大きく短縮させるなど効果が出て、高評価をいただいています。

当社は次世代型の解体機の保有比率が高いと思います。これには苦労やリスクもありますが、やったことで得られるノウハウの方が会社の未来にとっていいと考えています。思い切りよくやっています。特殊な難しい解体工事を当社のレンタル機やノウハウで施工をしていただけるようになりたい。そうならこれほど嬉しいことはありません。



SRC造の階上解体現場で作業するSK260ビックヘッド。SRC解体機SDS400SRCアームが装着されている。見た目にもスタンダードと思えるデザイン。



電動兼用のバックホウSK09SR。電動用の制御盤や電気コードがカウンタウエイト周辺部に搭載されている。レンタル機としてビル内装解体現場で活躍していた。